

約830年前の壇ノ浦の合戦後、能登に配流された平時忠の17回忌に合わせ発願されたと伝わる鎌倉時代の「紙本墨書大般若経」(県指定文化財)が23日、輪島市町野町の八幡寺で一般向けに初公開さ

輪島・八幡寺

れた。地域の歴史を見詰め直そうと地元の中町野老人会「みかがき会」が初めて企画した「歴史を語る会」で披露され、加能民俗の会の西山郷史副会長―珠洲市―が「能登の平家伝説の要となる史料」と貴重さを解説した。

平時忠ゆかり 大般若経初公開

八幡寺所蔵の大般若経は、力(ちから)で書写が進められ、6年後珠洲郡若山荘大谷の平兼基(かねもと)がに奉納された。県内最古で、1206(元久3)年に発願全600巻のうち585巻残し、奥能登一帯の社僧らの協(たす)っている点でも貴重という。

地元老人会が勉強会



初公開の大般若経に見入る参加者 ―輪島市町野町の八幡寺

時忠が能登で没した17年後の発願のため、供養の般若経とされる。

これまで公開は関係者による調査時や特別な催しの際に限られていた。歴史を語る会には老人会員や地元住民、加能民俗の会員らが集まり、歴史を感じさせる雁皮紙(がんぺいし)やコウゾ紙に墨書された経に見入った。西山副会長は「実物を通じて往時の様子を感じ取り、郷土の宝を守っていく思いを新たにしたい」と話した。老人会「みかがき会」は郷土史の勉強会を今後、定期開催していく。